

## 医者のお務めは「裏を読む」



医者というのは、ひとが良すぎて、ものの裏も読めないようでは務まらないかもしれない。

71歳のF子さん。3年前から、「軽度認知障害（MCI）」で通院している。最近、薬のみ忘れが多くなった。残念ながら、認知症に移行したのかもしれない。

MCIと認知症の違いは、日常生活に支障があるか否かだ。で、ワッシーはF子さんに、わざと質問する。「薬のみ忘れることないですか？」

### 「困ったことない？」

と。彼女は真顔で、「ゼンゼン」と答える。「鍋こがしは？」と聞いたら、「とんでもない。わたし、そんなのを見えますか？」と、ワッシーはたしなめられた。

F子さんは、頑として、「困ったことはない。自分は大丈夫だ」と言い張る。が、そこがあやしい。付き添いのひとの目は、「みんな、困っています」と答えている。

76歳のM男さん。記憶力が落ちて、自分がしたことを忘れてしまう。月

日もあやふやだ。だが、本人はもちろん、家族に、困ったことはないかと尋ねても、「ちょっと忘れっぽい」と言うだけである。そこで、毎日をどう過ごしているのか聞いてみて、納得した。

朝、起きて、洗顔、歯磨き、いつもの通り。朝食がすんだら、あとは新聞とテレビをゆっくり楽しむ。犬の散歩は、いつものコースで家の周りをぐるり。そうこうするとお昼だ。

## じっくり経過観察

といった具合に、どの行動もいつも通りだから、滅多に間違えはしない。家族の目から見ても、M男さんには目立った生活上の支障はないのだ。だが、MRI（磁気共鳴画像装置）では、海馬は萎縮し、認知症に違いはない。

患者さんや家族の情報を鵜呑みにしては、医者は誤診の山を築くだろう。まずは、認知症を疑うこと。そして、じっくり経過をみるのが肝要だ。ウーム。医者って、あまり良い仕事ではないかもしれないネ。  
（石黒修三 しいしくクリニック・脳神経外科専門医、金沢市在住）